乃美地域センターだより

NO．１５０　　令和７年９月

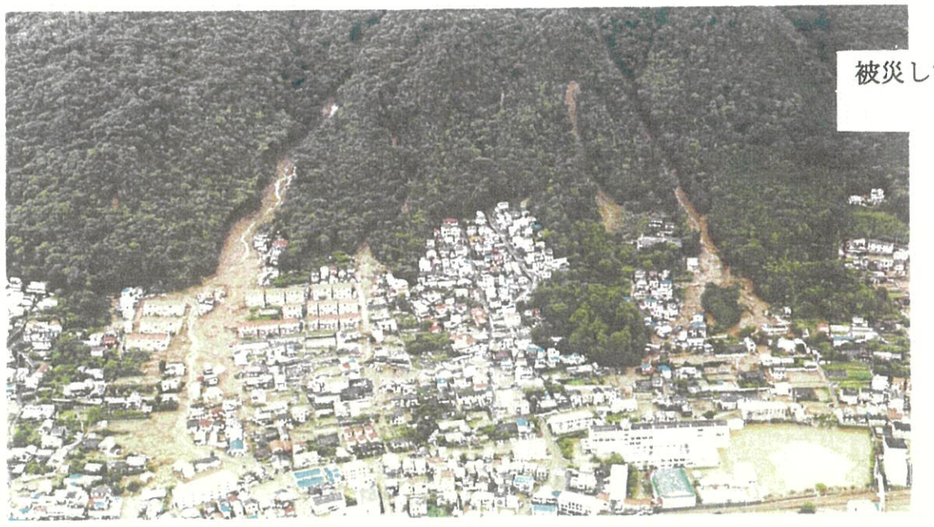
～砂防学の専門家を招いての研修会（ご案内）～

広島大学防災研究センター長　海堀正博氏（広大名誉教授）来館

「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉通り、猛暑続きの炎熱地獄も終わりの気配となってきました。朝・晩はめっきり涼しくなり、耳をすませば秋の虫の鳴き声も聞こえてきます。

夏の終わりから秋の始め（９月上旬～１０月）にかけて日本の南岸沿いには「秋雨前線」が停滞し、秋の長雨をもたらします。例年ならこの時期の雨は≪しとしと≫で形容されるような弱い降り方が特徴ですが、地球温暖化の影響を受けてか最近の雨の降り方は激しい雷雨を伴うような傾向が見られています。特に台風が近づくにつれ活発化し、これに≪線状降水帯≫が絡むと各地で大雨や洪水被害を拡大させます。９月前後の台風では熊本・鹿児島・秋田県など九州や東北地方では洪水被害が相次ぎ、被災住民は「何十年もこの地に住んでいるが、このような雨は初めてじゃ」と悲鳴の声をあげています。

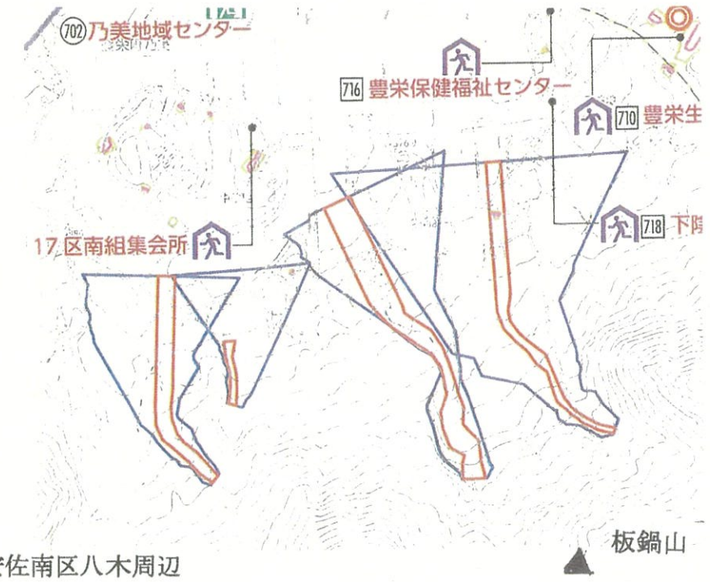
線状降水帯は次々と発生する積乱雲が列をなし、同じ場所を通過または停滞することで、線状に伸びた地域に記録的な大雨をもたらします。この線状降水帯という言葉が頻繁に使われるようになったのは、２０１４年（平成２６）８月の広島県での集中豪雨以来だといわれています。『広島大規模土砂災害』と呼ばれるこの災害は広島市北部の安佐北区や安佐南区の住宅地が土石流にのみこまれて９１名という多くの犠牲者をだしました。

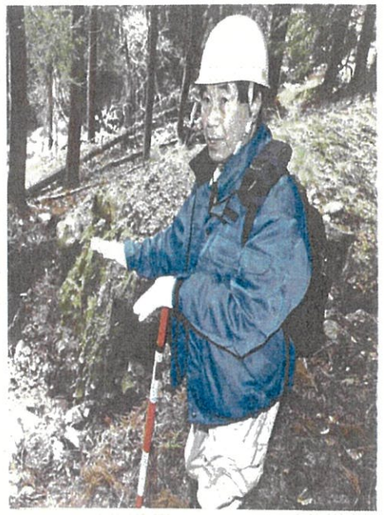


被災した広島市安佐南区八木周辺
（２０１４・８・２０）

図面は「乃美地域センターだよりＮＯ．１４３」で一度紹介したことのある乃美地区のハザードマップです。ひと目みて気づくのが板鍋山から伸びている三本の土石流（土砂災害警戒区域）の危険性が指摘されている図です。この現場を７月３０日（水）午前中、海堀教授とともに下見をいたしました。豊栄町は全体的には花崗岩が主体の地質ですが、板鍋山は頂上の大岩に見られるような流紋岩で覆われている地質構造となっているようです。花崗岩は風化すると真砂土（まさつち）となって非常もろい特徴があります。流紋岩は花崗岩より固い岩石なので、その点では多少の安堵感はあるものの油断は禁物とのことでした。特に豊栄町を線状降水帯が襲った場合は土石流の発生も否定はできません。

下見の結果をふまえて、１０月１２日（日）９時３０分より海堀教授を講師とした防災研修会を実施いたします。特に板鍋山の麓にあたる南組（垣内・垰谷）や北組（宇都山城から西教寺）の皆様には一人でも多く研修会に参加されることを希望いたします。講演終了後には車に分乗して実際に現地を視察する予定です。





≪海堀正博氏のプロフィール≫

○海堀教授は砂防学が専門で、２０２０年４月より広島大学の防災・減災研究センターのセンター長に就任。土砂災害を中心に多くの自然災害の発生原因を調査し、砂防学の研究・教育に従事されています。

長年にわたり砂防技術者の育成、土砂災害発生のメカニズムの研究を通して、総合的な土砂災害対策の進展に貢献した実績が評価され、２０２０年２月「赤木賞」を受賞されています。

伊能忠敬が歩いた道を歩こう

その②

《全2回》

―豊栄町乃美―

執筆　広島大学大学院人間社会科学研究科
教授　熊原康博

近世の道を歩く

地点⑥には道標があり、右ハ ひろ志満(広島) 左ハ 四日市 白市と書かれています。道標は、この野道が広島城下まで続く主要な街道だったことを示しています。また、この街道は広島と銀山街道の宿場町吉舎(現三次市)を結ぶことから「吉舎道」とも呼ばれていました。四日市とはJR西条駅がある地域にあたります。

興味深いのは、西条に行く道は現在の国道375号線のルートではなく、白市(東広島市高屋町)経由であったことです。ここから西条駅まで白市を経由すると約21キロメートル、国道375号線経由だと約18キロメートルとなり、白市経由の方が遠回りです。道標の建立年代は不明ですが、四日市と刻まれていることから江戸時代もしくは明治時代初め頃と推定されます。これは白市が当時地域の中心地であったことを物語ります(白市については、東広島デジタル掲載「東広島地歴ウォーク高屋町白市その①～③」参照)。

道標の下には、小さい字で「乃ミ たゞきち」と刻まれています。乃美在住のただきち氏が、この道標を寄進した方と推定されます。ただきち氏がどのような人かは今となっては知るすべはありませんが、旅人が迷うことがないように道の分岐に道標を設置した篤志家だったことがうかがえます。

県立賀茂北高校のグラウンドの脇である**地点⑦**には、乃美学舎(賀茂北高校の前身)の創立者である「佐伯衛先生頌徳碑」があります。裏面には衛氏の略歴などが書かれています(詳細は後述)。

さて、**地点⑥**から**地点⑧**の野道は、伊能忠敬が文化10年11月12日(1813年12月4日)に歩いた道にあたります。特に**地点⑧**は竹林の野道となり、当時と変わらない景観や道が残っています。野道を歩くと、起伏が少なく歩きやすいルートであると実感できます。

乃美学舎をたどる

地点⑨には、大きな石碑が国道375号線の脇に建てられています。「頌徳 佐伯美登先生」と刻まれ、文字は初代広島大学学長である森戸辰男氏の書によるものです。裏面に美登氏の経歴が詳しく書かれています。

美登氏は、本宮八幡神社(**地点③**)の宮司の家系の生まれで、兄の衛氏が大正3(1914)年に創立した、中等教育学校である私立乃美学舎の校長や理事長を勤めました。衛氏が昭和15(1940)年に死去されたために、その跡を引き継ぎ、乃美学舎、旧制乃美中学校、戦後の乃美学園(乃美中学校・高等学校)と校名を替えた学校の発展に先頭に立って尽くしたのです。一方で、美登氏は、充実した教育を安定的に行うためには、私立から公立に移行すべきと決断し、昭和40(1965)年に県立賀茂北高校となったのです。平成27(2015)年には乃美学舎の創立から100年を迎えました。

乃美の近くには、かつて上竹仁村(現福富町)に私立静学館(明治23(1890)年創立)がありましたが、昭和12(1937)年に廃校となりました(詳しくは、東広島デジタル掲載「東広島地歴ウォーク福富町上竹仁その①、②」)。乃美学舎を源とするこの学校は、静学館の廃校後も、豊田郡北部の中等教育を担う唯一の存在であり、今もその役割を果たしています。

〝鰻〟の字から

伊能忠敬は、測量の際に通った地名、川、橋などについて日記に書き残しています。乃美市の手前では「鰻川 土橋二間(約3・6メートル)」、「大川 土橋五間(約9・1メートル)」の順に川を越えたと日記に書かれています。川の並びから大川とは椋梨川のことで、鰻川とは現在の西原川にあたります(図②)。

地点⑩にある西原川にかかる橋の名は、「鰻田橋」です。鰻田は、近くの小字名です。日記にある「鰻川」と、「鰻田橋」には、どちらにも〝鰻〟の字が入っています。おそらくは鰻川(現西原川)近くで田んぼを作っていたことから、鰻田という地名が生まれ、さらにそれから橋の名になったのではないでしょうか。

国道375号線を進み、乃美の交差点を右に曲がり、ゴールの乃美地域センターに戻ります。

最後に

今回は、2回にわたり豊栄町乃美を見てきました。道標や伊能忠敬の日記の情報、現在も残る野道を組み合わせて、江戸時代の道を復元してみました。のどかな風景を楽しみながら、歩いてみてはいかがでしょうか。

〈参考文献〉広島県立賀茂北高等学校創立100周年記念事業実行委員会編(2015)『広島県立賀茂北高等学校創立100周年記念誌「稲葉の杜」』
豊栄町誌編纂委員会編(1968)『豊栄町誌』
熊原康博・岩佐佳哉編(2023)『東広島ウォーク』

地点⑥　福富と豊栄の境界にある道標

地点⑦　佐伯衛先生頌徳碑

地点⑥　道標の3Dモデル

地点⑧　昔の街道の雰囲気を残す野道

地点⑩　鰻田橋
背景の白い建物は賀茂北高校

地点⑨　「頌徳 佐伯美登先生」碑

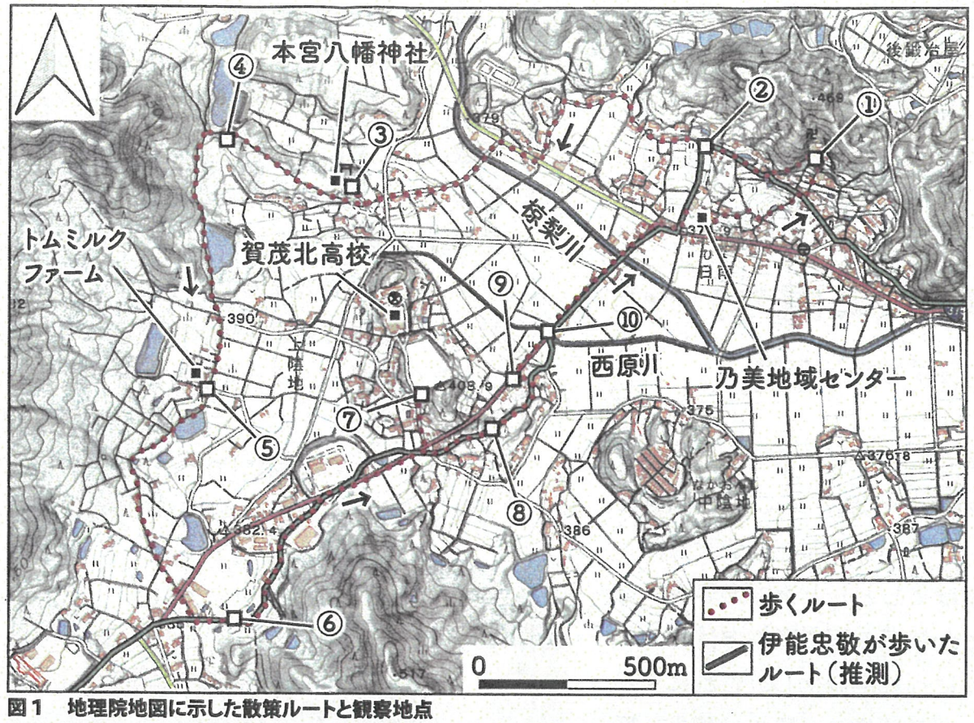


図1　地理院地図に示した散策ルートと観察地点

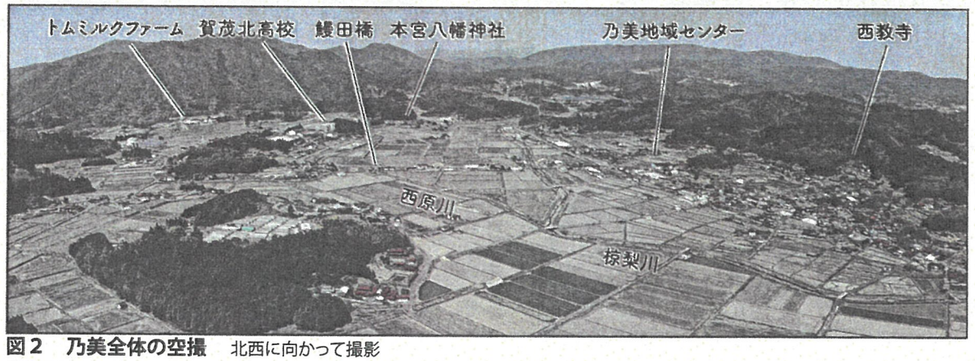


図2　乃美全体の空撮　北西に向かって撮影

《ルートの距離》
乃美地域センター(スタート)―【距離2.1km】→本宮八幡神社(地点③)―【1.3km】→トムミルクファーム(地点⑤)―【1.8km】→佐伯衛先生頌徳碑(地点⑦)―【1.4km】→ゴール　計6.6km